

(1)

自然数 a, b が $a^2 = 2b$ を満たすとき a は偶数であることを、背理法を用いて証明する。 a が奇数であると仮定すると、 a は自然数 m を用いて $a = 2m - 1$ と表せる。ここで、 a^2 は、

$$\begin{aligned} a^2 &= (2m - 1)^2 \\ &= 2(2m^2 - 2m) + 1 \end{aligned}$$

となるから $a^2 = 2b$ の左辺は奇数であるが、これは右辺の $2b$ が偶数であることと矛盾する。したがって、背理法により a は偶数であることが証明された。

(証明終)

(2)

自然数 c, d, e が $c^2 + d^2 = 3e$ を満たすとき、 c, d, e がいずれも 3 の倍数であることを背理法を用いて証明する。 c, d, e のいずれかが 3 の倍数で無いと仮定する。ここで c, d が対称であることを考慮して場合分けをする。以下、 m, n, l は 0 以上の整数とする。

[1] $c = 3m, d = 3n, e = 3l \pm 1$ のとき

左辺は、

$$c^2 + d^2 = 9(m^2 + n^2)$$

となるから 9 の倍数である。一方、右辺は

$$\begin{aligned} 3e &= 3(3l \pm 1) \\ &= 9l \pm 3 \end{aligned}$$

となり、9 の倍数にはならないから矛盾する。

[2] $c = 3m, d = 3n \pm 1$ のとき

左辺は、

$$\begin{aligned} c^2 + d^2 &= 9m^2 + 9n^2 \pm 6n + 1 \\ &= 3(3m^2 + 3n^2 \pm 2n) + 1 \end{aligned}$$

となり 3 の倍数にはならない。一方、右辺は $3e$ であり 3 の倍数であるから矛盾する。

[3] $c = 3m \pm 1, d = 3n \pm 1$ のとき

左辺は、

$$\begin{aligned} c^2 + d^2 &= 9m^2 \pm 6m + 1 + 9n^2 \pm 6n + 1 \\ &= 3(3m^2 \pm 2m + 3n^2 \pm 2n) + 2 \end{aligned}$$

となり 3 の倍数にはならない。一方、右辺は $3e$ であり 3 の倍数であるから矛盾する。

以上 [1], [2], [3] より、背理法により c, d, e はいずれも 3 の倍数であることが証明された。

(証明終)

(3)

数学的帰納法を利用して、すべての自然数 n に対して $n^{19} - n$ を 19 で割った余りは 0 であることを示す。

[1] $n = 1$ のとき

$$\begin{aligned} n^{19} - n &= 1^{19} - 1 \\ &= 0 \end{aligned}$$

となるから、成立する。

[2] $n = k$ (k は自然数) のとき

$k^{19} - k$ が 19 の倍数であることを仮定する。ここで、 $n = k + 1$ について計算すると、

$$\begin{aligned} (k+1)^{19} - (k+1) &= k^{19} + \sum_{i=1}^{18} {}_{19}C_i k^i + 1 - k - 1 \\ &= (k^{19} - k) + \sum_{i=1}^{18} {}_{19}C_i k^i \end{aligned}$$

が得られる。ここで ${}_{19}C_i$ ($i = 1, 2, \dots, 18$) について、その計算式は

$${}_{19}C_i = \frac{19!}{i!(19-i)!}$$

であるが、19 は素数であり、分母は 19 未満の自然数しか因数に持たないから、 ${}_{19}C_i$ はすべて 19 の倍数である。したがって、 $n = k + 1$ のときも成立する。

以上 [1], [2] より、数学的帰納法により、すべての自然数 n に対して $n^{19} - n$ を 19 で割った余りは 0 であることが証明された。

(証明終)

(1)

題意より、 $n=1, 2, 3, \dots, m+1$ のとき、

$$P_{m+1}(n) = P_m(n) = a_n$$

が成り立つので、

$$P_{m+1}(n) - P_m(n) = a_n - a_n = 0$$

である。

$$(答) P_{m+1}(n) - P_m(n) = 0$$

(2)

$P_m(x)$ が m 次以下の多項式であることから x の方程式 $P_{m+1}(x) - P_m(x) = 0$ は $(m+1)$ 次以下の多項式となる。(1)よりこの方程式は $x=1, 2, 3, \dots, m+1$ を解にもつことが分かるので、0でない実数 a を用いて、

$$P_{m+1}(x) - P_m(x) = a(x-1)(x-2)\cdots(x-m-1)$$

と表すことができる。この式において $x=0$ とすることで、

$$P_{m+1}(0) - P_m(0) = a(-1)(-2)\cdots(-m-1) = a(-1)^{m+1}(m+1)! \quad \dots \textcircled{1}$$

となり、また、 $x=m+2$ とすることで、

$$P_{m+1}(m+2) - P_m(m+2) = a(m+1)m(m-1)\cdots 1 = a(m+1)! \quad \dots \textcircled{2}$$

となる。①、②から $a(m+1)!$ を消去することで、

$$\begin{aligned} P_{m+1}(0) - P_m(0) &= (-1)^{m+1} \{P_{m+1}(m+2) - P_m(m+2)\} \\ &= (-1)^{m+1} \{a_{m+2} - P_m(m+2)\} \quad (\because P_{m+1}(m+2) = a_{m+2}) \end{aligned}$$

が成り立つことが示された。

(証明終)

(3)

$P_3(x)$ は 3 次以下の多項式であるから、

$$P_3(x) = px^3 + qx^2 + rx + s$$

とおくことができる。与えられた条件より、

$$\begin{cases} a_1 = P_3(1) = p + q + r + s = 1 \\ a_2 = P_3(2) = 8p + 4q + 2r + s = 2 \\ a_3 = P_3(3) = 27p + 9q + 3r + s = 3 \\ a_4 = P_3(4) = 64p + 16q + 4r + s = 5 \end{cases}$$

$$\therefore p = \frac{1}{6}, q = -1, r = \frac{17}{6}, s = -1$$

を得るから、

$$P_3(x) = \frac{1}{6}x^3 - x^2 + \frac{17}{6}x - 1$$

であることが分かる。従って、

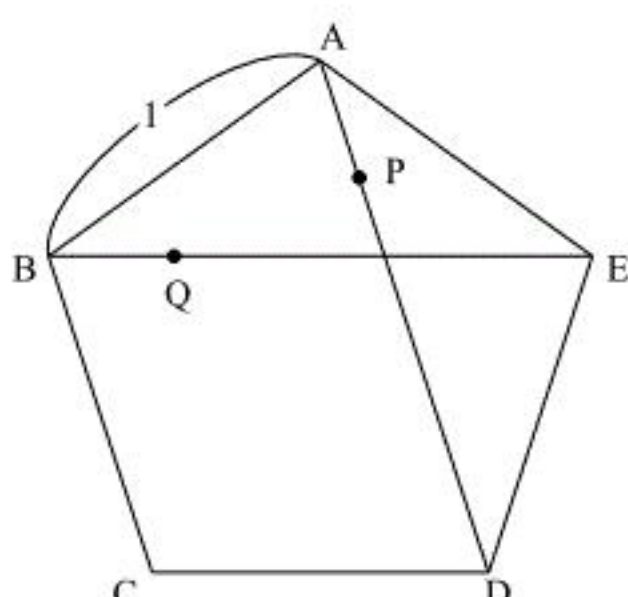
$$P_3(6) = \frac{1}{6} \cdot 6^3 - 6^2 + \frac{17}{6} \cdot 6 - 1 = 16$$

と求めることができる。

$$(答) P_3(6) = 16$$

(1)

正五角形を図示すると以下のようなになる。



正五角形の内角であるから、 $\angle BAE = \frac{3}{5}\pi$ である。したがって、内積 $\overline{AB} \cdot \overline{AE}$ を計算すると、

$$\begin{aligned}\overline{AB} \cdot \overline{AE} &= |\overline{AB}| \cdot |\overline{AE}| \cdot \cos \frac{3}{5}\pi \\ &= \cos \left(\frac{\pi}{2} + \frac{\pi}{10} \right) \\ &= -\sin \frac{\pi}{10} \\ &= \frac{1-\sqrt{5}}{4}\end{aligned}$$

となる。

(証明終)

(2)

$\triangle CBD$ において余弦定理より

$$\begin{aligned}BD^2 &= CB^2 + CD^2 - 2CB \cdot CD \cos \frac{3}{5}\pi \\ &= 2 - 2 \cdot \frac{1-\sqrt{5}}{4} \\ &= \frac{3+\sqrt{5}}{2} \\ \therefore BD &= \sqrt{\frac{3+\sqrt{5}}{2}} \\ &= \frac{\sqrt{6+2\sqrt{5}}}{2} \\ &= \frac{1+\sqrt{5}}{2}\end{aligned}$$

が得られる。ここから \overline{AP} を求める。まず \overline{AD} は、 \overline{BD} と \overline{AE} が平行であることを用いて

$$\begin{aligned}\overline{AD} &= \overline{AB} + \overline{BD} \\ &= \overline{AB} + \frac{1+\sqrt{5}}{2} \overline{AE}\end{aligned}$$

と表せる。したがって、 \overline{AP} は

$$\begin{aligned}\overline{AP} &= t \overline{AD} \\ &= t \overline{AB} + \frac{1+\sqrt{5}}{2} t \overline{AE}\end{aligned}$$

となる。次に、 \overline{AQ} を求める。点Qは線分BEを $t:(1-t)$ に内分する点であるから、

$$\overline{AQ} = (1-t) \overline{AB} + t \overline{AE}$$

となる。

$$\text{(答) } \overline{AP} = t \overline{AB} + \frac{1+\sqrt{5}}{2} t \overline{AE}, \overline{AQ} = (1-t) \overline{AB} + t \overline{AE}$$

(3)

$\angle APQ = \frac{\pi}{2}$ のとき、 $\overline{AP} \cdot \overline{PQ} = 0$ が成立する。したがって、

$$\begin{aligned}\overline{AP} \cdot \overline{PQ} &= 0 \\ \Leftrightarrow \overline{AP} \cdot (\overline{AQ} - \overline{AP}) &= 0 \\ \Leftrightarrow \overline{AP} \cdot \overline{AQ} - |\overline{AP}|^2 &= 0\end{aligned}$$

が得られる。これを分割して計算する。まず、 $\overline{AP} \cdot \overline{AQ}$ について

$$\begin{aligned}\overline{AP} \cdot \overline{AQ} &= \left(t \overline{AB} + \frac{1+\sqrt{5}}{2} t \overline{AE} \right) \cdot \left\{ (1-t) \overline{AB} + t \overline{AE} \right\} \\ &= t(1-t) + \frac{1+\sqrt{5}}{2} t^2 + \left\{ \frac{1+\sqrt{5}}{2} t(1-t) + t^2 \right\} \overline{AB} \cdot \overline{AE} \\ &= t(1-t) + \frac{1+\sqrt{5}}{2} t^2 + \left\{ \frac{1+\sqrt{5}}{2} t + \frac{1-\sqrt{5}}{2} t^2 \right\} \frac{1-\sqrt{5}}{4} \\ &= \frac{1+\sqrt{5}}{4} t^2 + \frac{1}{2} t\end{aligned}$$

となる。次に、 $|\overline{AP}|^2$ は

$$\begin{aligned}|\overline{AP}|^2 &= \left(\frac{1+\sqrt{5}}{2} t \right)^2 \\ &= \frac{3+\sqrt{5}}{2} t^2\end{aligned}$$

が得られる。したがって、 $\overline{AP} \cdot \overline{AQ} - |\overline{AP}|^2 = 0$ に代入すると

$$\begin{aligned}\frac{1+\sqrt{5}}{4} t^2 + \frac{1}{2} t - \frac{3+\sqrt{5}}{2} t^2 &= 0 \\ \Leftrightarrow -(5+\sqrt{5}) t^2 + 2t &= 0 \\ \Leftrightarrow t \left\{ 2 - (5+\sqrt{5}) t \right\} &= 0 \\ \therefore t = \frac{5-\sqrt{5}}{10} \quad (\because 0 < t < 1)\end{aligned}$$

が得られる。

$$\text{(答) } \frac{5-\sqrt{5}}{10}$$

(1)

曲線 C_1 の式を微分すると、

$$y' = \frac{1}{x}$$

となり、曲線 C_2 の式を微分すると、

$$y' = 2ax$$

となる。曲線 C_1, C_2 が $x=x(b)$ で接することから傾きが等しいので

$$\frac{1}{x(b)} = 2a \cdot x(b)$$

$$\Leftrightarrow a\{x(b)\}^2 = \frac{1}{2} \quad \dots \textcircled{1}$$

が得られる。また、 $x=x(b)$ で y 座標が一致することから、

$$\log x(b) = a\{x(b)\}^2 - b$$

が得られる。これに①を代入すると、

$$\log x(b) = \frac{1}{2} - b$$

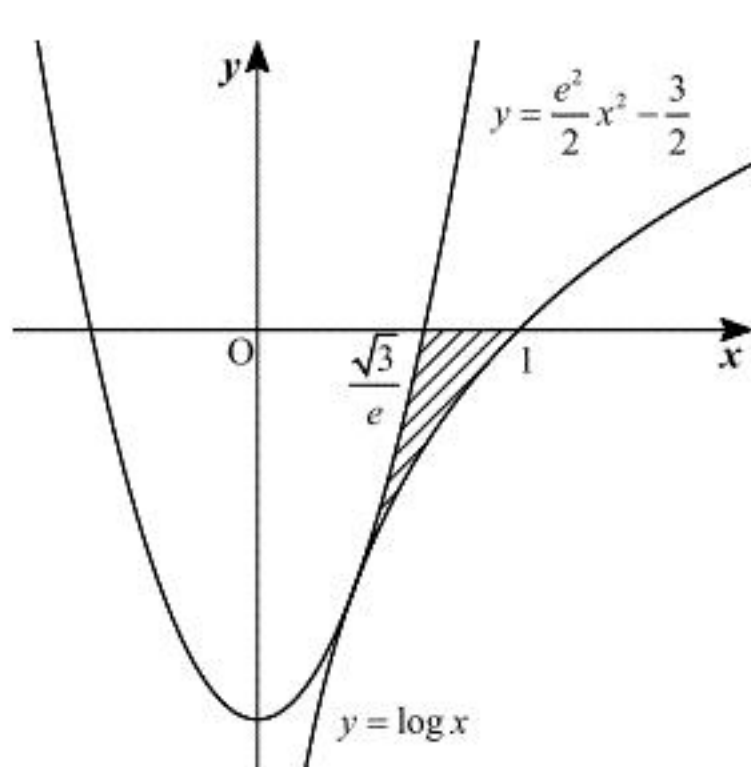
$$\Leftrightarrow x(b) = e^{\frac{1}{2}-b}$$

が求まる。

$$(\text{答}) \quad x(b) = e^{\frac{1}{2}-b}$$

(2)

$b = \frac{3}{2}$ のとき接点 P の x 座標は e^{-1} となる。また①より、 a の値は $\frac{1}{2}e^2$ となる。



したがって、斜線部の面積は

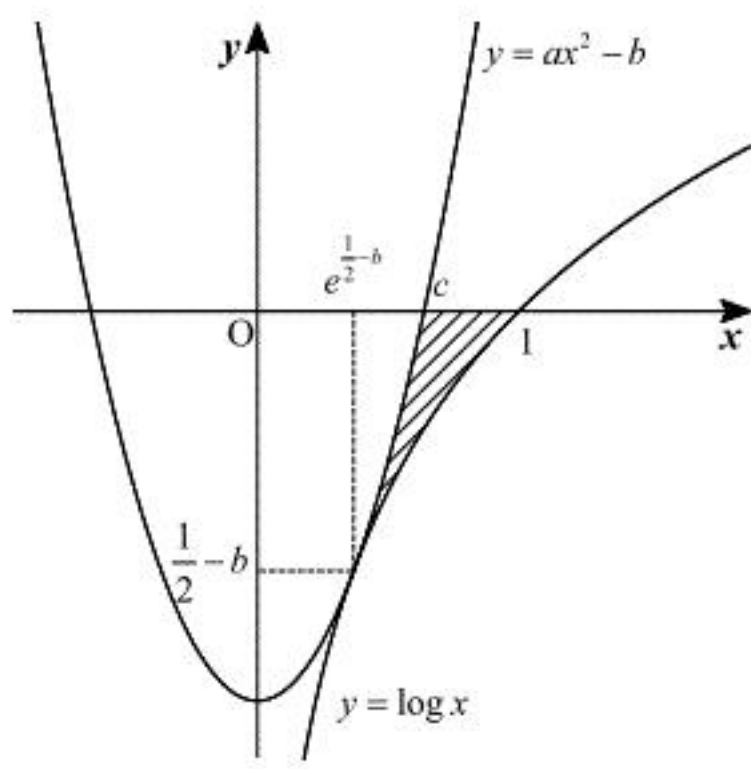
$$\begin{aligned} S\left(\frac{3}{2}\right) &= \int_{e^{-1}}^{\sqrt{3}e^{-1}} \left\{ \left(\frac{e^2}{2}x^2 - \frac{3}{2} \right) - \log x \right\} dx + \int_{\sqrt{3}e^{-1}}^1 (-\log x) dx \\ &= \int_{e^{-1}}^{\sqrt{3}e^{-1}} \left(\frac{e^2}{2}x^2 - \frac{3}{2} \right) dx - \int_{e^{-1}}^1 \log x dx \\ &= \left[\frac{e^2}{6}x^3 - \frac{3}{2}x \right]_{e^{-1}}^{\sqrt{3}e^{-1}} - [x \log x - x]_{e^{-1}}^1 \\ &= \frac{\sqrt{3}}{2}e^{-1} - \frac{3\sqrt{3}}{2}e^{-1} - \frac{1}{6}e^{-1} + \frac{3}{2}e^{-1} + 1 - 2e^{-1} \\ &= 1 - \frac{2+3\sqrt{3}}{3}e^{-1} \end{aligned}$$

となる。

$$(\text{答}) \quad S\left(\frac{3}{2}\right) = 1 - \frac{2+3\sqrt{3}}{3}e^{-1}$$

(3)

$S(b)$ を図示すると以下ようになる。ただし、 $y = ax^2 - b$ ($x > 0$) x 軸の交点の x 座標を c とする。



(1)の結果より、

$$a = \frac{1}{2}e^{2b-1}$$

となる。また、 x 軸との交点の x 座標 c は、

$$c = \sqrt{\frac{2b}{e^{2b-1}}}$$

である。ここで、 $x(b), c$ の $b \rightarrow \infty$ の極限を求めるために、 $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{x}{e^x}$ の値を求める。

$f(x) = e^x - \frac{1}{2}x^2$ ($x \geq 0$) とすると

$$f'(x) = e^x - x$$

$$f''(x) = e^x - 1$$

より、 $x \geq 0$ において $f''(x) \geq 0$ が成立する。これと $f'(0) = 0$ より $x \geq 0$ において $f'(x) \geq 0$ が成立する。また、これと $f(0) = 1 > 0$ より、 $x \geq 0$ において $f(x) > 0$ 、つまり $e^x > \frac{1}{2}x^2$ が成立する。よって $x \geq 0$ において

$$0 \leq \frac{x}{e^x} < \frac{2}{x} \quad \left(\because e^x > \frac{1}{2}x^2 \geq 0 \right)$$

であり、 $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{2}{x} = 0$ であるから、はさみうちの定理より $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{x}{e^x} = 0$ と求まる。これを用いると

$$\lim_{b \rightarrow \infty} x(b) = \lim_{b \rightarrow \infty} e^{\frac{1}{2}-b} = 0$$

$$\lim_{b \rightarrow \infty} c = \lim_{b \rightarrow \infty} \sqrt{\frac{2b}{e^{2b-1}}} = 0$$

となる。また、 $e^{\frac{1}{2}-b} > 0$ と $\sqrt{\frac{2b}{e^{2b-1}}} > 0$ が常に成り立つことから、 $x(b), c$ は正の値側から 0 に

近づく。ここで $S(b)$ を計算すると、

$$\begin{aligned} S(b) &= \int_{x(b)}^c \left\{ \left(\frac{e^2}{2}x^2 - \frac{3}{2} \right) - \log x \right\} dx + \int_c^1 (-\log x) dx \\ &= \int_{x(b)}^c \left(\frac{e^2}{2}x^2 - \frac{3}{2} \right) dx - \int_{x(b)}^1 \log x dx \\ &= \left[\frac{e^2}{6}x^3 - \frac{3}{2}x \right]_{x(b)}^c - [x \log x - x]_{x(b)}^1 \\ &= \frac{e^2 c^3}{6} - \frac{3}{2}c - \frac{e^2}{6}\{x(b)\}^3 + \frac{3}{2}x(b) + 1 + x(b) \log x(b) - x(b) \\ &= \frac{e^2 c^3}{6} - \frac{3}{2}c + 1 - \frac{e^2}{6}\{x(b)\}^3 + \frac{1}{2}x(b) + x(b) \log x(b) \end{aligned}$$

が得られる。ここで、 $x \log x$ の $x \rightarrow +0$ の極限を求める。 $x = \frac{1}{e^t}$ とおき、 $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{x}{e^x} = 0$ を用いると、

$$\lim_{x \rightarrow +0} x \log x = \lim_{t \rightarrow \infty} \frac{-t}{e^t} = 0$$

が得られる。したがって、

$$\lim_{b \rightarrow \infty} S(b) = \lim_{b \rightarrow \infty} \left\{ \frac{e^2 c^3}{6} - \frac{3}{2}c + 1 - \frac{e^2}{6}\{x(b)\}^3 + \frac{1}{2}x(b) + x(b) \log x(b) \right\} = 1$$

が示された。

(証明終)